



Title	Referral pattern to nephrologist and prognosis in diabetic kidney disease patients: Single center retrospective cohort study
Author(s)	岩田, 幸真
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/96335
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

Synopsis of Thesis

氏 名 Name	岩田 幸真
論文題名 Title	Referral pattern to nephrologist and prognosis in diabetic kidney disease patients: Single center retrospective cohort study (糖尿病性腎臓病患者の腎臓専門医紹介時病態と予後についての単施設後ろ向きコホート研究)
論文内容の要旨 〔目的(Purpose)〕 糖尿病性腎臓病(DKD)が末期腎不全の主要な原疾患となっており、DKDの進行抑制が重要である。各種ガイドラインでは腎臓専門医紹介時期が記載されているが、大部分の患者はより腎機能が低下した段階で紹介されている。さらに、腎臓専門医への早期紹介が透析導入後の予後改善につながることも報告されている。また、2型糖尿病患者に対する集学的治療がDKDの発症ならびに進行抑制に有効であることも示されているが、DKD患者について腎臓専門医紹介時病態とその後の予後について検討した報告は少ない。DKD患者の腎臓専門医病態ならびにその後の予後について検討すること。 〔方法(Methods)〕 単施設後ろ向き観察研究 2010年10月から2014年9月に当科紹介となったDKD499例の内、腎生検にてDKD以外の原疾患が確定された24例、水腎症を呈していた3例、紹介時に尿蛋白の測定がなされていなかった24例、eGFR60ml/min/1.73m²以上であった41例、腎臓専門医受診後の予後を同定できなかった100例を除外した307例を解析対象として、腎臓専門医紹介時病態と2016年12月までの腎予後ならびに心血管複合イベント(全死亡、心血管イベント)について評価し、多変量解析により腎予後ならびに心血管複合イベントに関連する因子を同定した。 〔成績(Results)〕 年齢は69歳、男性70.7%であり、腎臓専門医紹介時eGFR22.3ml/min/1.73m²、尿蛋白2.83g/gCrであった。腎臓専門医紹介時CKD stageは3aが26例(8.5%)、3bが67例(21.8%)、4が134例(43.6%)、5が80例(26.1%)であった。観察期間30カ月の間に121例が腎代替療法を要し、Kaplan-Meier曲線からはCKD stage5で紹介となった患者の約半数は1.5年で末期腎不全に至っていた。多変量解析では腎臓専門医紹介時腎機能、年齢、悪性疾患既往、収縮期血圧が腎予後と独立して関連していた。心血管複合イベントについては、観察期間35カ月の間に113例に心血管複合イベントが発症した。その内訳は35例が死亡し、21例が冠動脈疾患、39例が心不全、9例が末梢動脈疾患、9例が脳卒中であったが、腎臓専門医紹介時のCKD stageによる差異は見られなかった。多変量解析では心血管疾患の既往のみが心血管イベントと独立して関連していた。 〔総括(Conclusion)〕 DKD患者の腎臓専門医紹介時eGFRは22.3ml/min/1.73m²まで低下しており、CKD stage5で紹介となった患者の約半数は1.5年で末期腎不全に至っていた。	

論文審査の結果の要旨及び担当者

(申請者氏名)		岩田 幸真	
論文審査担当者	(職)	氏 名	
	主 査	大阪大学教授	緒取 善隆
	副 査	大阪大学教授	下村 伸一郎
	副 査	大阪大学教授	野々村 祝夫

論文審査の結果の要旨

糖尿病関連腎臓病 (DKD) は、新規透析導入患者の40%を占めるだけでなく、心血管病発症・死亡のリスクも高く、DKDの進行抑制が重要である。

CKD診療ガイドラインでは腎臓専門医への紹介時期が記載されているが、腎臓専門医への紹介時の患者背景と予後に關するエビデンスは乏しい。申請者は単施設後ろ向き観察研究により、DKD患者における腎臓専門医への紹介時の患者背景と予後について解析を行った。

2010年10月から2014年9月の間に大阪急性期・総合医療センターの腎臓・高血圧内科に紹介されたDKD307例を対象としている。腎臓専門医紹介時のeGFRは $22.3\text{ ml/min/1.73m}^2$ 、尿蛋白は 2.83 g/gCr であり、腎臓専門医紹介時CKD stageは3aが26例 (8.5%)、3bが67例 (21.8%)、4が134例 (43.6%)、5が80例 (26.1%) であった。観察期間30カ月の間に121例が腎代替療法を要し、Kaplan-Meier曲線からはCKD stageG5で紹介された患者は半数が約1.5年で腎代替療法を要していた。

心血管複合イベントについては、観察期間35カ月の間に113例が心血管複合イベントを発症した。その内訳は35例が死亡し、21例が冠動脈疾患、39例が心不全、9例が末梢動脈疾患、9例が脳卒中であったが、腎臓専門医紹介時のCKD stageによる差異は見られなかった。

上記研究はDKD診療における地域連携を構築していく上で有益な報告であり、学位論文に値すると判断する。